

Ⅳ. 出土遺物

表御殿から出土した遺物は、土器類をはじめ金属製品・木製品・石製品さらに動植物遺体に至るまで、その量はおびただしい。ただ、表御殿がその創建当初から明治年間に解体されるまで、一度の大規模な天災・人災も受けることなく平和裡に事が移行したこともあり、出土遺物中に表御殿を特色付けるものはあまり遺存しておらず、圧倒量が当時の日常雑器類それも比較的時代の新しいもので占められている。ここでは、それらを逐次紹介するだけの紙面も力量ももちあわせていないので、比較的遺存の良好であった資料を紹介するにとどめたい。

土 器

出土遺物の主たるものは、やはり土器である。陶磁器を中心に土師質土器が若干含まれている。ところで、近世後期の陶磁器として、当地には湖東焼が存在した。湖東焼は文政12年(1829)、城下の商人絹屋半兵衛たちにより創始され、井伊直亮・直弼・直憲の3藩主の代に藩の御用窯として栄えた。その後衰退しながらも、再び民窯として、窯の火は明治28年(1895)まで点り続けた。この間、白く堅く焼き締った磁器を中心に、染付・金欄手・赤絵などの細やかで美しい焼物がつくられた。^{註①}現在、湖東焼は、ややもすると豪華で華麗な美術工芸的側面のみが強調され、そのイメージが市中を席捲している。しかし、湖東焼もまた当時各藩で試みたと同様、殖産興業の一翼を担う重要な商品であった。贈答用などに華麗な作品が制作される一方で、日用品ないしそれに近い作品も数多く焼かれている。ところが、その方面の研究はほとんどなされておらず、^{註②}実体がわかっていないのが実情である。本項で略記する資料中には、湖東焼と断定し得る前者の類例外にも、後者ではないかと推測されるものがある。断定できるだけの資料的裏付けはいまだないが、あえてそのことを明記して、読者諸賢の研究の指標にしたいと思う。

茶碗

染付の磁器製茶碗を中心に、陶製のものが存在する。これらの茶碗は、その器形からA-Fの6種に分類されるようである。A類(01-09)は口縁に向かって緩やかに立ち上がる飯茶碗形のもの。B類(10-13)は口縁端が外反する端反口のもの。逆にC類(14)は口縁端が内傾する寄せ口のもの。腰胴部は丸くおだやかな曲線となる。D類(15-18)は半筒形を呈するもの。詳細にみると、腰部から胴部へ一度明確に曲折するタイプ(15・16)と、C類風に丸く曲がるタイプ(17・18)の2様が識別される。E類(19)は天目茶碗。そしてF類(20)は、口縁に向かって直線的に開くもの。「広東碗」の称がある。

01 灰白色の精良な素地に、青白発色の美しい釉を厚めにかけた青磁碗。口径12.2cm、器高6.5cm、高台径5.3cmの法量。断面台形の輪状高台よりゆるやかに内湾して伸びる体部はそのまま口縁に至り、端部に平坦面を形成する。体部外面の蓮弁文は片切彫りで刻まれるが、鎚や間弁は表現されていない。見込には口縁端部に至るまで一面に劃花文が描かれている。おそらくは14C後半から15Cにかけての年代観が得られるもので、中国は龍泉窯系の製品と考えられる。器形および蓮弁文については青森県尻八館出土青磁碗に同タイプを見い出すものの、見込文様はその類例を知見し得ない。^{註②}稀少な伝世品である。(清水尚)

02 蓋物の染付茶碗。体部外面と蓋表には、太湖石と牡丹を中心に風にそよぐ秋草を器面にほどよく描く。筆にいきおいがあり、絵付の域をこえた絵画的手法が感じられる。見込と蓋裏には一重の円圏の中央に牡丹のつばみらしきものがワンポイント風に描かれており、蓋表の高台内には一重角枠に「旭」の一字が判読される。素地

は精緻で、染付の肌にはほのかな青味がかかっている。湖東焼か。口径9.8cm、身の器高4.9cm、蓋付の総高6.2cmを計る。5 D区 S E 01出土。

03 02同様蓋物の染付茶碗。呉須の発色も良好であり、やはり湖東焼か。体部外面と蓋表には、軽妙な筆致で銘花十友図が描かれる。蓋表の余白には、漢詩が書き加えられている。蓋表の高台内には二重円圈に「畠」の文字が銘記される。身の口径10.8cm、器高4.6cm。蓋は口径9.2cm、器高2.8cm。身は8 F区の能舞台漆喰内から、蓋の一片は7 D区整地層、他の一片は7 H区 S D 24内からそれぞれ出土していたものが合致した資料。

04 体部外面に大小の丸文を散らした染付茶碗。素地はやや荒く、呉須は釉ともども褐色味を帯びる。いわゆるくらわんか手の茶碗。見込には2重円圈の中央に退化した印判手五弁花文が配される。口径11.4cm、器高6.0cm。7 F区整地層内出土。

05 器壁は厚手で、青灰褐色味を帯びた釉がぼつてりとかかる。体部外面には、草花文が軽快な筆致で描かれる。くらわんか手の茶碗。口径11.0cm、器高5.9cm。7 H区整地層出土。

06 素地は良好だが、呉須はあまり精良なものを使用していないためやや褐色味を帯びており、釉も全体に灰褐色となる。体部外面に描かれた文様は、退化が著しく、本来何を意図したものであったかはっきりしないが、皿(24)に描かれた牡丹や草花文がさらに退化したものかと思われる。見込に一重の円圈があり、中央に判読不明の記号が置かれる。口径9.8cm、器高4.8cm。11 D区 S F 05より出土。

07 体部外面に網手文を配した茶碗。高台内中央には、二重円圈に判読不良の一字が置かれる。口径11.3cm、器高5.5cm。11 L区 S D 51出土。

08 全体に薄手で高台の低い茶碗である。体部外面は、円窓に秋の意匠を配し、円窓の間を氷割文で埋める。口径10.2cm、器高4.6cm。4 G区 S L 04出土。

09 素地は薄手で緻密。体部外面いっばいに空を群舞する鶴を描く。鶴は上下2段構成。類例が井伊家伝来資料の中にある。湖東焼か。口径9.6cm、器高4.8cm。8 H区整地層内出土。

10 素地は精緻で、呉須には透きとおるような深みのある発色がある。釉にはほのかな青味がかかる。体部外面に細い線描にて菊花と漢詩を配す。見込には二重円圈内に成化年製の文字。高台内中央にも二重角枠内に隸書風の書体で「春」の一字を置く。井伊家伝来資料中に「春」の銘をもつ呉春の作品があり、その作風に似る。湖東焼か。口径8.8cm、器高4.1cm。9 K区整地層内出土。

11 素地は緻密で比較的薄手の作品。体部外面に退化した波に千鳥文様を描く。見込には「寿」の一字が配される。口径10.6cm、器高5.5cm。11 D区 S F 05内出土。

12 体部外面に退化した松竹梅文様を配した茶碗。見込にも竹文様が1つ置かれる。口径10.8cm、器高5.9cm。11 D区 S F 05出土。

13 呉須・釉ともに褐色を帯びた作品。体部外面に「寿」の捻文様などが配される。見込に判読不良の一字。口径9.5cm、器高5.1cm。6 C区 S F 01内出土。

14 口縁部がわずかに寄せ口となり、内部へ抱える形態(C類)の茶碗。体部外面には、既述の茶碗(09)に良く似た鶴の群舞する姿が描かれる。そして見込に亀が一匹ひそむ。めでたい意匠の茶碗である。本例も湖東焼の可能性が考えられる。口径8.5cm、胴部最大径8.7cm、器高5.8cm。8 J区整地層内出土。

15 体部外面および口縁内側に横位に連続する瓔珞繫文を描いた半筒形の茶碗。高台脇に宝巻文がめぐり、見込中央には印判手五弁花文を置く。口径7.6cm、器高6.0cmを計る。12 I区 S D 50出土。

16 半筒形の体部にわずかな高台がついた小型の茶碗。素地は緻密で器壁は薄い。呉須の発色も良好。体部外

面には山水図が描かれる。口径7.1cm、器高4.5cm。13K区S D56出土。

17 腰を丸く立ち上げた半筒形の茶碗。素地は緻密で、比較的薄手の良品。体部外面いっばいに網手文が描かれる。口径10.6cm、胴部最大径11.1cmとわずかに寄せ口となる。器高は5.4cm。7D区S D13出土。

18 素地は灰褐色を呈し緻密。高台を除いた部分に灰釉がかかる。胴部外側には3条の横位の凹線が走り、鉄釉の笹文がワンポイントとして描かれる。見込には3つの小さな目跡が確認される。口径11.3cm、器高6.0cm。14J区整地層出土。

19 比較的なだらかに立ち上がる胴部に、やや外反気味の口縁がつく。素地は灰白色。胴部下半より腰部にかけてへう削りを施し、内面および外面上半部に鉄釉をかける。鉄釉は褐釉の上から黒釉が散っている。口径10.5cm、器高7.1cm。遠侍(A)地区出土。

20 緻密な肌の内外面に、梅樹とそのまわりを飛び交う鶯の姿を大胆に描いた染付の茶碗。呉須の発色は良好で、その透きとおった線のにじみが面白い。湖東焼の作品か。口径9.4cm、器高5.1cm、高台高1.5cm。12I区S D50出土。

急須

21 球形に近い胴部に、把手と注口を付け、甲盛りの蓋がのる。胴部と蓋には菊や梅などの草木が大胆かつ生々とした筆致で描かれている。把手下面に楷書で「湖東」の2文字がひそむ。盛期の湖東焼の優品である。湖東焼の急須にはいくつかの特色がある。まず、器壁がたいへん薄いこと。そして、蓋がある特定の位置以外では開かないよう綿密に成形されている点。一方、底部は糸切りをして削ったものではなく、一度底部を切り取って、別に造った薄手の皿状の底を、凹面を内側にして貼り付けたものである。その結果、底部は著しく内反りとなる。ところで底部の貼り付けには「どべ」と称す水分の多い泥土が使用される。この「どべ」は、こうした接合以外にも、底部や蓋裏の凹面に、さざえの蓋にある渦巻のような螺旋状の突起をつける際に用いられる。それは、凹面を一端平滑に仕上げた上で、「どべ」を篋先につけて意図的に作り出したものである。茶の湯において、名茶碗の高台内に蛭尻(になじり)と称す渦巻が散見されるが、高級品を指向した湖東焼は、どうやらそのあたりにヒントを得て、それを意図的に急須その他各器種に応用したようである。とまれ、以上述べてきた湖東焼急須の特色を、本例はすべて兼ね備えている。口径6.4cm、底径5.6cm、胴部最大径8.5cm、総高7.1cmをそれぞれ計る。11D区S F05出土。

鉢

22 半筒形をした陶製の鉢。本来は蓋付であったと予想される。素地は灰褐色を呈し、高台を除いた体部内外面に灰釉がかかる。胴部には、さらにその上へ鉄釉による幅1cm余の帯が2重にめぐっている。見込に小さく3つの目跡が残る。口径10.7cm、器高8.5cm。庭園(E)地区整地層出土。

行平鍋

23 浅鉢形の胴部に把手と注口を付け、蓋をのせた行平鍋。赤褐色の素地を生かし、とびカンナ痕を幾重にもめぐらせて飾る。把手と注口部それに蓋裏のみ灰釉がかかる。把手表には意味不明ながら浮文様が施されている。この手の行平鍋の場合、通常浮文様として蟬などの昆虫ないし草木などが表現されていることが多く、裏に大きく楷書で「湖東」と浮文様が入る。現在も湖東焼の窯跡で多く採集することのできる資料であり、湖東焼の歴史の中では比較的新しい所産と解される。口縁端はS字に外反し、蓋が重なり易くなるよう工夫されている。口径16.4cm、底径6.5cm、総高12.5cm。5D区S E01出土。

皿

- 24 見込と周囲を円圏で画しながら、退化した牡丹と草花文を描く。素地は緻密だが、呉須は褐色味が強く、釉も同色にややにごっている。見込に目跡が5つ確認される。口径13.8cm、器高3.0cm。11D区S F05出土。
- 25 白磁肌を基調とする菊皿。口縁端は褐釉で口紅を施して飾る。口径14.6cm、器高3.5cm。11E区整地層出土。

蓋

蓋には磁器製のものと陶器製のものの2様があり、形態からみると、浅い茶碗をひっくり返した形状のもの(A類)、低い山形の頂部に宝珠つまみを持ち下部にかえりが付すもの(B類)、比較的扁平でつまみがなく、かえりがわずかに認められるもの(C類)、大型で内反りした中央につまみを形成するもの(D類)、A類に形状が似るが大型で扁平なもの(E類)に分けることが可能なようである。A類は明らかに茶碗の蓋であり、26・27の2例ある。B類は土瓶の蓋。大小があり28—32の5例。C類は33—36。33は中央に1孔が穿たれており、別材のつまみを挿入していたとも考えられ、やや異質である。C類は小型の鉢などに供された蓋か。D類は鉢や貯蔵用甕の蓋。37と38が相応しよう。E類は39の1例で、行平鍋の蓋と考えて相違あるまい。以下、順次その概要を記すことにしよう。

- 26 素地は緻密で、釉にほのかな青味がある。蓋表にやや簡略化された牡丹唐草文が描かれる。湖東焼に類例あり。口径9.1cm、器高2.6cm。試掘調査時に出土。
- 27 26同様に素地が緻密で、呉須の発色がすばらしく、釉に青味がかかる。蓋表には銘花十友図が大胆かつ精緻に描かれ、その一部は蓋裏にまで連続する。よくみると、蓋表の高台わきは、篋を使用し、7回で1週するように曲面をカットしている。いわゆる削ぎ篋であり、奇をてらった粋な処置と解される。同様に高台内にも、先述の蜷尻が認められる。湖東焼の作品である可能性が高い。口径8.4cm、器高2.6cm。6G区整地層出土。
- 28 低い山形の頂部に宝珠つまみを付け、下端にわずかなかえりを設けた土瓶用の蓋。灰褐色の素地に乳白色の釉をかけ、鉄釉などで簡易な連続文様を配す。乳白色の釉には細かい亀裂が入る。径7.6cm、器高3.8cm。11E区整地層出土。
- 29 28と同様の器形。褐色の素地の蓋表のみ乳白色の釉をかけ、さらに鉄釉と灰釉で簡易な連続文様を描く。径7.6cm、器高3.0cmを計る。8G区整地層出土。
- 30 比較的扁平な体部の中央に、粘土紐を一度ひねって貼り付けたつまみが付く。下端にはわずかなかえりがある。素地は乳褐色。蓋表には灰褐色の釉をかけ、その上に赤・緑・白などの色絵を配す。緑は退色が著しい。径7.6cm、器高2.2cm。11H区S X08出土。
- 31 扁平な体部中央に宝珠つまみを置き、下端にはかえりがある。黒灰色の暗い素地の蓋表のみ白釉をかけ、呉須と鉄釉で簡易な文様を描く。径7.3cm、器高1.8cm。7F区S D13出土。
- 32 大型の土瓶蓋。灰褐色の素地の蓋表のみゴマ塩風の釉がかかる。その上から鉄釉と呉須で連続文様が描かれる。径11.2cm、器高4.4cm。試掘調査時に出土。
- 33 山形の頂部に1孔を穿った蓋。別材のつまみが挿入されていたのであろう。素地は黒褐色。蓋表は同心円状の凹凸を削り出し、そこに呉須と白釉を塗り分ける。径4.8cm、器高2.5cm。8F区整地層出土。
- 34 扁平な円板状の体部下端にわずかなかえりをもつ蓋。素地は乳白色で比較的緻密である。呉須で笹と遠山が描かれる。径5.6cm、器高0.5cm。7D区S D13出土。
- 35 扁平な台形の下端にかえりを作り出した蓋。蓋表とかえりの内部に灰釉をかける。径6.7cm、器高1.3cm。10I区整地層出土。
- 36 中央を円形に窪ませ、そのために下端のその部分が突出した小型の蓋。かえりはなく、形状は次の内反り

タイプに似るが小型である。灰褐色の素地に乳白色の釉がかかる。径4.7cm、器高0.9cm。8 G区整地層出土。

37 内反りした蓋表の中央につまみを置くもの。つまみは亀の姿。亀は頭をもたげ、甲には亀甲文が刻まれる。褐色の素地に乳白色の釉がかかる。釉下に素地の褐色の肌が透けて、微妙な色あいを呈している。径9.5cm、器高1.8cm。5 H区S D03出土。

38 内反りにした上端を水平方に内外へ張り出した形の蓋。蓋表中央には、円板の両側をはさみ起こしたつまみが置かれる。素地は褐色できめが細かく、蓋表のみ灰釉がかかる。径13.3cm、器高2.8cm。6 C区S F01出土。

39 行平鍋の蓋。薄手で、灰褐色の素地に内外とも黄釉がかかる。蓋表には線刻で同心円文を施して飾りとする。径16.0cm、器高3.4cm。15 L区S X14出土。

徳利

40 筒状の胴部に比較的大型の口頸部が付いた染付徳利。胴部には、芦間に遊ぶ鶴が1羽大胆に配されている。素地は精良。湖東焼か。口径3.3cm、底径6.2cm、器高17.5cmを計る。5 D区S E01出土。

41 中太の胴部に小さく口頸部が付いた徳利。胴部中位の3ヶ所が窪み、表面全体に灰釉がかかっている。瀬戸美濃系の徳利。胴部最大径8.5cm、器高19.1cm。7 D区S D13出土。

42・43 丸みを帯びた胴部に、外反する口頸部が付いた小型の徳利。褐色の素地に白釉を漬けかけする。43の底部には回転糸切り痕が明瞭に残る。42の胴部最大径5.0cm、底径3.3cm、器高9.2cm。43の胴部最大径4.8cm、底径3.3cm、器高8.0cmを計る。42は7 D区S D13出土。43は9 J区S D45出土。

盃

44 体部内外面にわたり梅樹を描いた染付盃。体部外面は曲面を篋で連続的に切り取って削ぎ篋とする。高台内には蜷尻がある。素地は緻密で、呉須の発色も良い。湖東焼か。口径6.8cm、器高3.1cm。6 G区整地層出土。

45 体部をS字状に立ち上がらせた染付の盃。体部外面はロクロ目が意識的に強調されている。見込と高台内には蜷尻風の渦巻を施す。呉須の発色は良好で、釉にはわずかな青味がある。これも湖東焼か。口径6.7cm、器高3.1cm。9 G区整地層出土。

焼塩壺

46・47 焼塩壺の身。46は截頭円錐形の型に粘土板を巻きつけ、底部を貼り足したもの。型は芯に平織りの布を巻きつけていたようで、その圧痕が内側に良く残っている。外面はへうで整形されているが、その際口縁端は外傾斜に面取りする。蓋を密着させるための所為と解される。口径5.8cm、底径4.3cm、器高6.8cmを計る。7 H区S D24出土。47は身の一部。46同様に粘土板を巻きつけ、底部を貼り足したものと思われる。底部貼り足しの痕跡が、内面の粘土ひずみとなって遺存する。胴部中位に刻印が押されており、最後の文字「生」のみ判読される。類例^{註③}から察して、生産地「泉州麻生」を印したものであろう。7 F区整地層出土。

48—54 いずれも焼塩壺の蓋。48は円板形の粘土の片側に球形の型を押しあてて断面弧状の蓋としたもの。型には布が巻きつけられていたようで、その圧痕が残る。49—54の蓋は、いずれも円板形の粘土の片側に、それより一まわり小さい円柱形の型を強く押しあてて蓋としたものである。その結果、蓋は逆凹字形の断面を呈す。型にはやはり布を巻きつけていたようで、その圧痕がいつれの蓋にも確認される。圧痕を残す凹部の径が身の外径に相応するよう計算されているのであろう。各蓋の径と厚さは、48が6.1cmと1.7cm、以下49は7.3cm・1.2cm、50は7.6cm・1.7cm、51は8.1cm・2.1cm、52は7.8cm・2.1cm、53は7.9cm・1.9cm、54は7.9cm・1.8cmをそれぞれ計る。48は8 J区整地層、49は11 J区S P 7、50は7 F区整地層、51は7 H区整地層、52は13 K区S D56、53は7 H区S D24、54は7 H区S D24出土。出土地点の多くが表向の御料理之間や御臺所の位置にあたる点は留意される。

灯明皿

55-58 素焼きの坏型を呈すかわらけを、灯明皿に転用したもの。55・56・58の3点は素地が赤褐色、57は灰褐色を呈す。いずれも口縁部に灯心の煤が炭化して付着しており、58は当初より内側を黒く塗って仕上げる。口縁の立ち上がりは、55・56・58はおだやかに弧を描くが、57は大きく屈曲して比較的直線的な立ち上りを示す。轆轤を引いて制作し、坏部内面と口縁部外面はナデ仕上げ。口縁部以下の外面は左まわりの細い篋削り仕上げとする。4点いずれも坏部内面の屈曲点あたりに一条の沈線がめぐっている。口径・沈線の径・器高は、55が12.3cm・9.1cm・2.1cm、以下同様に56は12.3cm・9.2cm・2.3cm、57は14.2cm・9.5cm・2.6cm、58は12.7cm・8.8cm・2.1cm。いずれも7H区SD24出土。

瓦炉

59 瓦質の灯明皿。砲弾形の上側部にハート形の窓をあけ、背面上部には通気孔が1孔設けられている。頂部には松笠をアレンジした突起を付し、そこに1孔を穿って釣部とする。体部外面はヘラミガキを施してあり、銀色に輝く。内部はナデ仕上げ。ユビ押さえなどによる圧痕が顕著に残る。底部には墨書で「三拾五」と記す。底径16.4cm、器高15.4cm。5D区SE01出土。

火鉢

60 胴部から口縁に至るまで丸く収めた瓦質の抱火鉢。比較的高めの掬形を呈する脚が付く。脚には対角線上に各1孔計2孔の円孔が穿たれる。口縁部にも2孔を1単位とする円孔が認められる。体部外面は平滑にナデ上げており、肩には上下の沈線の間を、花菱のスタンプ文様が横位に連続する。寄せ口となった口径15.7cm、器高18.6cm。6C区SF01出土。

植木鉢

61 筒形の体部に、外へ水平に張り出す口縁を付した植木鉢。底部中央に1孔が穿たれる。体部外面には特色ある河骨文様が削り込まれ、その上から緑と黄の釉が流し掛けされる。体部内面はハケで鉄釉を塗る。瀬戸産。口径31.2cm、底径19.0cm、器高20.7cmを計る。11I区SX06のすぐ南で、倒立状態で出土したもの。

建水

62 比較的浅い餌畚（えふご）形を呈する陶製建水。体部内外面に褐釉を施し、さらに黒釉を肩からかけてその流れを楽しむ。底部はヘラで面取りをするが、意図的に荒くすることで侘た風情をかもし出す。底部には二重小判形枠に楷書で「湖東」の銘が付される。器高7.4cm。奥向12L区の局棟をめぐる溝SD55より出土。

香炉

63 空炷用の染付小型香炉。口縁端は内側に折り返して煙返しとする。高台は円板貼り漬け高台。体部外面には草花文様が描かれる。呉須はやや褐色味を帯びている。口径5.2cm、器高3.5cm。13L区SL13出土。

筆筒

64 わずかに胴の張った円筒形の筆筒。器壁は比較的薄い。素地は灰褐色を呈し、透漆を塗って焼成後、赤青黄緑の釉を使って色絵を施す。絵柄は竹葉に枝折れの草木。底部には墨書があり「ロロカ ロトテ」と判読される。意味不明。口径及び底径は5.5cm、胴部最大径6.1cm。器高は10.4cm。13K区SD55出土。

水滴

65 染付の箱形水滴。一隅に注口を穿つ。表面には、机にむかい書をしたためる子供の姿を浮彫りにする。机の下あたりのみ呉須がかかるが、他は白磁質の釉でおおわれる。4.9cm×3.6cm、厚さ1.3cm。7E区SD13出土。

66 青磁の花瓶形水滴。つくりは偏平。胴部には表裏とも、花に舞う蝶の姿が浮文様として表現される。器高

4.3cm、胴部最大径2.5cm。10 J 区整地層出土。

散蓮華

67 陶製の匙。散った1弁の蓮華に似るところから付けられた名称だが、文字通り1弁の蓮華が型押しされている。蓮華の周囲は七宝のつなぎ文様がめぐり、その部分のみ瑠璃釉を施す。3 I 区整地層出土。

箸置

68 白磁質の鳥形を呈する箸置。羽を重ねて休む姿の鳥をうまく箸置にみたてた作品。長さ5.5cm、幅2.7cmを計る。14 L 区整地層出土。

神酒徳利

69 神前にそなえることを目的に作られた小型の染付徳利。玉壺春形(いわゆるらっきょう形)の体部に玉縁の口縁が付く。体部外面には簡略化された松竹が描かれる。口径1.7cm、胴部最大径4.0cm、底径2.7cm、器高5.8cm。10 F 区整地層出土。

仏飴具

70 仏にそなえる米飯を入れる小型の器。椀状の体部に高い脚部が付く。体部外面には、淡い呉須を使用して蕨手唐草文が描かれる。脚は中実の筒部と末広がりの台部から構成され、両者間に段を有する。椀部口径6.6cm、高さ3.1cm、脚部下端の径4.0cm、高さ2.9cm、総高6.0cmを計る。12 L 区 S D 54 出土。

紅入

71 坏部にわずかな高台を付した紅入。内外面とも白釉をかけた陶器である。坏部外面には蕨手唐草文が型押しされる。口径6.2cm、器高1.4cm。8 F 区整地層出土。

72 71と同器形、同仕様の紅入。坏部外面には二枚貝風の文様が型押しされる。口径4.8cm、器高1.5cm。5 I 区 S V 06 出土。

73 坏部に高台を付した染付紅入。体部外面には、若松と鶴が対峙的に精緻に描かれており、小器ながらしっかりした作品に仕上がっている。口径4.9cm、器高1.2cm。12 I 区 S D 60 出土。

雛茶碗

74 口縁に向かって緩やかに立ち上がる飯茶碗形の染付雛茶碗。体部外面には萩が可憐な姿に描かれる。雛茶碗は雛道具の一具としても現存するが、茶碗の雛形として小児の玩具などにも用いられたであろう。口径2.4cm、器高1.5cm。庭園(E)地区出土。

75 口縁端が外反する端反口の雛茶碗。高台脇以下の一部は露胎となる。口径2.9cm、器高1.6cm。10 K 区整地層出土。

その他の遺物

ガラス製品

76 不透明の褐色ガラスを使用したワインボトル。奥向で多数出土したが、本例は其中最も遺存が良好であったもの。肩がわずかに張り、底部は大きく内反する。口縁部には著しい凹凸が認められる。肩部径8.8cm、底径7.9cm、器高29.4cm。12 E 区園池出土。

77 緑色ガラスの小瓶。気泡を多く混入するが、比較的薄手の作。型物であることを示す縦位の鱗状はみだしが対する2ヶ所で確認される。口縁部が若干欠損する。8 F 区整地層出土。

木製品

78 紫檀製の小物入。各稜を唐戸面に削り出す。口は合わせ口とし、小物を入れるため内面を削り貫いている。13.6cm×5.7cm。厚さ1.4cm。11K区SE05出土。

79 短冊形をした付札。上端近くに1孔を穿ち、そこに紐を通して荷に結えていたもの。4隅は面取りが施しており、表裏に「於左枝との 屋とより □□□」と「堀居傳次様 さえ □□□」の墨書がある。最後の3文字は表裏とも「かくし」か。「さえ（左枝）」は局に勤める侍女の名であろうか。下端幅3.1cm、上端幅3.5cm、長さ16.0cmを計る。11K区SE05出土。

石製品

80 長方形の小型硯。硯縁の多くが割れて遺存しない。墨池は浅い。鉄釘が溶着してしまっている。12.4cm×6.3cm。厚さ1.4cm。8F区能舞台漆喰枿内出土。

81 一般的な長方形の硯。墨を磨る墨堂部には右上から左下へ斜めに走る使用痕が著しい。所有者が相当癖のある使用を重ねた結果であろう。硯背には、墨堂裏あたりに深さ数mmの浅い掘り落とし（覆手・ふしゆ）が認められる。机上で安定良くするための所為という。16.4cm×7.5cm。厚さ2.4cm。5D区SE01出土。

金属製品

82 銅地に銀で飾った簪。銅線を二つ折りにして先端を尖らせ、折り曲げた所に円板を貼り付ける。円板には、表裏とも羽を広げた蝶の文様を配している。全長16.2cm。円板径1.3cmを計る。13K区SD56出土。

83 表御殿跡からは多数の煙管片が出土したが、この煙管はそのなかでは特殊な形態を示す煙管。円筒形の火皿の下腹部に直接ラウが付く。ラウは直線的に伸びて吸口に至る。吸口の形態もいささか異色で変化に富み、端部はラッパ状に開いて終る。素地は銅製だが、表面を銀で飾っている。火皿の径0.8cm、ラウの径0.6cm、吸口径0.7cm、全長9.7cmを計る。9H区整地層出土。

84 吸口からラウそして雁口の首部までを一枚の銅板を巻いて作り、そこに火皿を付したものの。吸口はわずかに開き気味とする。首部の脂返しの湾曲は小さい。火皿の径1.0cm、ラウの径0.9cm、吸口径0.6cm、全長12.4cm。9H区整地層出土。

85 表御殿跡出土例の多数を占めた煙管。大小があるが、本例は大の部類に属す。比較的大型の火皿に、ゆるやかに湾曲した脂返しが付く。ラウは雁首内にわずかにその木質を残すのみ。吸口はしだいに径を細めて端部に至る。火皿の径1.5cm、ラウの径1.2cm、吸口径0.4cm、雁首長7.3cm、吸口長9.3cmを計る。遠侍(A)地区整地層出土。

86 ここで紹介する渡来銭は、4H区で検出した土壇(SK04)より出土したものである。その出土状況の詳細については遺構の項で述べたが、壇底より一括出土している。いずれも円形方孔のもので、古くは唐の「開元通寶」より宋の「政和通寶」まで16種76枚を数える。それら1つ1つの細かいデータは表7に示したとおりである。江戸期の遺構であるにもかかわらず、寛永通寶を1枚も伴出しない点が留意されよう。江戸時代前期の貨幣史を簡単に振り返ると、慶長13年(1609)に徳川家康によって永楽銭の使用禁止が命じられ、寛永13年(1636)、初めて寛永通寶が鑄造される。そして寛文10年(1670)、寛永通寶以外の銭貨の通用を禁止する御触書が出されている。これらのことから、江戸時代初期においては、寛永通寶の普及はいまだ遅々としたものであり、その間隙を従来の渡来銭が埋めていた様子が知られる。ところで、近年の近世遺跡の発掘例をみると、どうやら18世紀前半頃まで渡来銭を使用していたようである。ただし、その使用用途は備蓄銭の他、六道銭や奉賽銭など、流通貨幣としての用途とはいささか異なる場合が多いようである。本例なども、出土遺構や状況を加味すると、奉賽銭として埋置された可能性が考えられる資料である。

貨幣 番号	名 称	時代・初発年次	法 量			銭 文		備 考
			径(mm)	厚(mm)	重量(g)	読方	書体	
01	開元通寶	唐・621	24.50	1.20	3.0	対読	真書	背に甲文
02	開元通寶	唐・621	24.95	1.15	3.1	対読	真書	背に甲文
03	開元通寶	唐・621	24.35	1.10	2.8	対読	真書	
04	開元通寶	唐・621	23.95	0.85	2.5	対読	真書	
05	開元通寶	唐・621	25.00	1.05	2.9	対読	真書	背に甲文
06	至道元寶	宋・995	24.70	1.05	3.3	順読	真書	
07	至道元寶	宋・995	24.70	1.15	3.6	順読	行書	
08	至道元寶	宋・995	24.70	1.15	3.3	順読	草書	
09	祥符元寶	宋・1008	25.00	1.20	3.5	順読	真書	
10	祥符元寶	宋・1008	24.75	1.25	3.4	順読	真書	
11	祥符元寶	宋・1008	24.20	1.15	3.0	順読	真書	
12	祥符元寶	宋・1008	24.40	1.30	3.4	順読	真書	
13	祥符元寶	宋・1008	25.30	1.15	3.7	順読	真書	
14	天禧通寶	宋・1017	24.10	1.35	3.8	順読	真書	
15	天禧通寶	宋・1017	25.40	1.35	4.3	順読	真書	
16	天禧通寶	宋・1017	25.35	1.20	3.6	順読	真書	
17	天禧通寶	宋・1017	25.30	1.25	3.8	順読	真書	
18	天聖元寶	宋・1023	24.65	1.15	3.0	順読	真書	
19	天聖元寶	宋・1023	24.85	1.15	3.2	順読	真書	
20	天聖元寶	宋・1023	24.55	1.05	3.1	順読	真書	
21	景祐元寶	宋・1034	24.35	1.35	3.3	順読	真書	
22	景祐元寶	宋・1034	24.80	1.00	2.9	順読	真書	
23	景祐元寶	宋・1034	24.90	1.00	3.1	順読	篆書	
24	皇宋通寶	宋・1037	24.45	1.00	3.1	対読	真書	
25	皇宋通寶	宋・1037	24.55	1.15	3.4	対読	真書	
26	皇宋通寶	宋・1037	24.00	1.30	3.4	対読	真書	
27	皇宋通寶	宋・1037	24.20	1.10	3.0	対読	篆書	
28	皇宋通寶	宋・1037	24.30	1.10	3.3	対読	篆書	
29	皇宋通寶	宋・1037	24.90	1.30	4.0	対読	篆書	
30	皇宋通寶	宋・1037	24.25	1.20	3.4	対読	篆書	
31	至和元寶	宋・1054	24.25	1.15	3.0	順読	真書	
32	至和元寶	宋・1054	24.40	1.30	3.7	順読	篆書	
33	嘉祐元寶	宋・1056	24.85	1.30	3.7	順読	篆書	
34	嘉祐通寶	宋・1056	24.25	1.20	3.5	対読	真書	
35	嘉祐通寶	宋・1056	24.55	1.45	3.8	対読	真書	
36	嘉祐通寶	宋・1056	25.10	1.05	3.3	対読	真書	
37	嘉祐通寶	宋・1056	24.35	1.35	3.6	対読	篆書	
38	治平元寶	宋・1064	23.40	1.30	3.0	順読	真書	

貨幣 番号	名 称	時代・初発年次	法 量			銭 文		備 考
			径(mm)	厚(mm)	重量(g)	読方	書体	
39	治平元寶	宋・1064	24.25	1.30	3.6	順読	真書	
40	治平元寶	宋・1064	23.90	1.25	3.7	順読	篆書	
41	治平元寶	宋・1064	23.95	1.30	3.9	順読	篆書	
42	熙寧元寶	宋・1068	23.85	1.40	3.9	順読	真書	
43	熙寧元寶	宋・1068	23.70	1.30	3.6	順読	篆書	
44	元豐通寶	宋・1078	24.45	1.10	3.1	順読	行書	
45	元豐通寶	宋・1078	22.95	1.45	3.6	順読	行書	
46	元豐通寶	宋・1078	24.55	1.05	3.4	順読	行書	
47	元豐通寶	宋・1078	23.85	1.40	3.9	順読	行書	
48	元豐通寶	宋・1078	25.00	1.20	3.6	順読	行書	
49	元豐通寶	宋・1078	23.95	1.15	3.2	順読	行書	
50	元豐通寶	宋・1078	24.05	1.10	3.1	順読	行書	
51	元豐通寶	宋・1078	24.35	1.05	3.2	順読	行書	
52	元豐通寶	宋・1078	24.25	1.50	4.1	順読	行書	
53	元豐通寶	宋・1078	24.45	1.15	3.8	順読	行書	
54	元豐通寶	宋・1078	25.00	1.10	3.2	順読	行書	
55	元豐通寶	宋・1078	23.85	1.25	3.8	順読	行書	
56	元豐通寶	宋・1078	24.65	1.45	3.6	順読	篆書	
57	元豐通寶	宋・1078	24.20	1.05	3.2	順読	篆書	
58	元豐通寶	宋・1078	23.60	1.20	3.2	順読	篆書	
59	元豐通寶	宋・1078	23.80	1.25	3.5	順読	篆書	
60	元豐通寶	宋・1078	23.55	1.45	3.9	順読	篆書	
61	元祐通寶	宋・1086	24.05	1.25	3.7	順読	真書	
62	元祐通寶	宋・1086	24.45	1.25	3.5	順読	篆書	
63	元祐通寶	宋・1086	24.45	1.15	3.6	順読	篆書	
64	元祐通寶	宋・1086	23.80	1.20	3.6	順読	篆書	
65	元祐通寶	宋・1086	23.80	1.20	3.1	順読	篆書	
66	元祐通寶	宋・1086	23.85	1.15	3.3	順読	篆書	
67	紹聖元寶	宋・1094	24.80	1.15	3.5	順読	真書	
68	紹聖元寶	宋・1094	23.70	1.25	3.7	順読	真書	
69	紹聖元寶	宋・1094	23.90	1.05	3.2	順読	真書	
70	紹聖元寶	宋・1094	24.60	1.20	3.4	順読	真書	
71	聖宋元寶	宋・1101	24.05	1.40	3.7	順読	真書	
72	聖宋元寶	宋・1101	23.75	1.20	2.9	順読	篆書	
73	聖宋元寶	宋・1101	24.75	1.40	4.2	順読	篆書	
74	政和通寶	宋・1111	24.65	1.25	3.4	対読	真書	
75	政和通寶	宋・1111	24.30	1.20	3.1	対読	真書	
76	政和通寶	宋・1111	24.30	1.20	3.5	対読	篆書	

表7 D地区SK04出土渡来銭一覧表

註

- ① 『小企画展湖東焼展示図録』 彦根城博物館 1988
- ② 上田秀夫「14-16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- ③ 渡辺誠「江戸の焼塩壺」『季刊考古学』13 1985
- ④ 亀田駿一「近世の渡来銭」『出土渡来銭』考古学ライブラリー45 1986